

報仇

繪本四季物語

前篇

一

913.5
工
前編 1

喜怒哀樂可以勸善  
喜怒哀樂可以懲惡

# 報繪本四季物語

大坂

榮木書樓梓

三通鼓角四夏雞

日色高升月色低

時序秋冬又春夏

舟車南北復東西

鏡中次第人顏老

世上參差事不齊

若向其間尋穩便

一壺濁酒一餐蔬

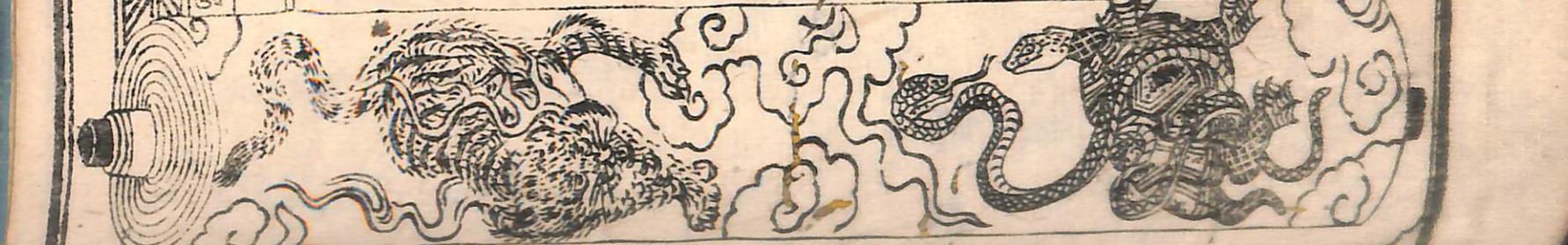


唐伯虎題





# 所 論



春夏秋冬自序

晉郭熙嘗著山水論曰。春則豔  
冶如咲。夏則蒼翠如滴。秋則明  
淨如粧。冬則慘淡如睡。語豈非  
浪說也。余偶遊覽武州金澤。感  
春想秋。欲使<sub>下</sub>芻蕘語<sub>中</sub>其地之山  
水<sub>上</sub>芻蕘。復請使<sub>下</sub>余語<sub>中</sub>江都之劇  
場。余固不知劇場。頓以爲此。一

出戲資其口譚蓋應兒輩所好  
耳。題曰春夏秋冬皆趣之所在。  
雖無復序引之可徵。能俾觀者  
如目擊歌舞也。此雖特爲獎飾  
戲謔。然有所喚醒俗子而盡情  
亦何害爲浪說哉。曩昔孔翁猶  
有所戲詩曰。善戲謔。今不爲虐  
兮。作者在焉。一日書肆來需稿  
於余曰。屬者稗史行于世。有是  
哉事之奇也。盍傳之上。東矣。於  
是休暇。舐筆。遂序以授焉。  
文化三曆舍丙寅春正月

東都

振鷺亭主人





第六齣

路江身を朝夷奈此切通カト入カト陷カトす  
艶ウツク之ノ佑ユキ血チ々チ鼻ハナ缺ケ地チ藏ゾ入ス濺スく

四之卷

松風マツカゼ僂人ウツシヤ十覽ジュウラン臺ダイ小奇コキを現アハを

路江ミチエ料兒リョウイ鎌倉山カマクラヤマ入イ操マツル々々耀ヤウす

伊三イサ由比濱ユビハマ入イ擅ウチ拏カ印インを賺ウす

三途さんず河婆カハ新居ニヤウの談タン魔堂マドウ入イ荒アラむ

五之卷

第九齣

嶮峰ケンポウ檢校ケンギョウ綽チヤク趣ソウ入イ劇場ゲキヤウ入イ説セツ  
艶ウツク之ノ佑ユキ奇キ出デ入イ江エ湖コ上ウヘを玩アソ

盤井イハシ唐士テウシ原ハラ入イ奇キ緑キョクを結ムス成ス

高麗コウライ四郎シロウ花水ハナミヅ橋ハシに兄ケイ第ダイを物モノを

前編五卷

第十齣

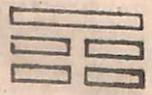
報ウチ仇コト四季シキ物語モノガタリ前篇ゼンペン總目次ソウモクジ畢ハル



路江



木配東其色青主春  
八難之木陰也号萱  
性女其德元其志怒  
其声呼

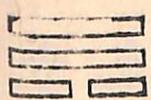


東遇春為肝臟  
為尚書主生之  
木陽也号青帝  
龍王其音角出  
双調声



澤田  
艶之  
佐

火配南其色赤主其  
 二儀之火陰也号陽  
 童女其德亨其志喜  
 其声笑



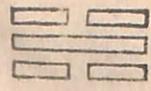
盤井



坂東三田五郎是業

南遇箕為心  
 臟為帝君七  
 陽之火陽也  
 号赤帝龍王  
 其音徵出黃  
 鐘調





男女川滝之助

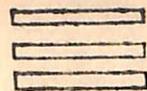
西、過、秋、為、肺、臟、  
為、將、軍、九、厄、之、  
金、陽、也、号、白、帝、  
龍、王、其、音、高、出、  
平、調、声、



金、配、西、  
其、色、  
白、主、秋、  
四、絶、之、金、陰、也、号、美、勢、女、  
其、德、利、其、志、憂、其、声、哭、

路里



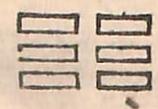


北遇冬為賢臟  
 為列女一德之  
 水陽也号黑帝  
 龍王其音羽出  
 盤淺調



平冢高麗四郎金孝

水配北其色黑  
 主冬六害之水  
 陰也号福女其  
 德貞其志恐其  
 声呻



富里



○原是書皆寓言亦但事蹟ナシトイハ唐解元奇出して世ヲ玩フ故事ヲ以証トス作者ノ本ツ所マツ易ノ乾天ヲ包坤地ヲ資テ黄帝龍王惠吉女ニ效テ二個ノ夫妻ト作シ竟ニ八卦ノ人物ヲ生ス那八名ノ佳人才子各奇ヲ振世ヲ驚シテ共ニ功勳ヲ立名義ヲ顯スニ件々アリ事ヲ成ニ至テ六之ヲ大虚ニ飯スソレ易經開卷兩卦コレ乾坤ニ震離巽ハ只ハ男女タリ男女ノ剛柔ヲ四時ノ配遇ニ撮テ以趣ヲ掲出し終ニ場ノ奇聞ト成ス乾元亨利貞ノ五冊ニ至ラハ自ラ貞正利アルヲ喻頌ル春秋ノ名義ヲ識ラシ觀者共レ察諸○總テ事游戲ニ出テ殆劇本ニ類シ而モ正史ニ合ストイハ亦裨官者流ノ遺意ナリ最猥雜ヲ厭スシテ鏡花水月頌アリ逆アリ實ニ善ヲ彰シ惡ヲ瘴ル事切ニメ兒輩ノ哭ヲ止ム作者ノ本懐於是方暢タリコレ江湖上ノ歌吹臺ニメ聊談笑ニ擬スル耳庶覽者コレヲ玩テ儻能共向慕スル所ヲ知ラハ則一ツノ助ナラメヤハトソ

報仇四季物語前編卷之一

東都

振鷺亭主人著

第一齣

江嶋小艶之佐書画乃會を闘也  
 七里濱小濱瀬夫人風流を競す

粵あつ北條きたがう太京たいけい太夫氏たふし康かた八相別はちさうべつ小田原おくだわら不在ふざい味あじと威いと遠とん近きんと  
 震ふるをを區くスス小田原おくだわらハハ雙ふた花はな乃の地ちとと高たかのの輩はひ弱じやく也也而而下したの  
 驅かき施し盜たう人にんハハ先せん祖そ早さう雲うん也也其その後のち一いつ矢やのの衝つ小澤こさわ  
 田た艶えん之の佐すけとと人ひとありあり先せん祖そハハ藤ふじ倉くら終しゆう昌ちやう乃の時とき代だい杖しやう本ほん坐ざとと  
 出い身しんしてして俣い豆づ相さう模ものの山やまをを一いち身しんにに更さらかかわわてて後のち志し々々末まつ料りやうとと依よてて  
 一時いちじ巨きよ萬まんのの豪ごう富ふととりりをを以もつ來きた小こ條じやう家けのの軍ぐん用よう金きんとと調てう連れん

連々不仕送也乃由(今艶之依代)到ても尚國主の顧面と羨す  
 ちまはかのづらふ乃用ひも重く祖考の庇廕由因て家声の聞  
 隠るるも艶之依素も聰明極く豊饒の鉤の字同天を  
 色琴の成右は書とたは弦を詩文を器風雅れ乃通せざるは  
 艶之依のく富貴小満なるのふあは生得て容貌清雅白粉と  
 傳言が如く唇朱成塗るるごとくはて極て故東一乃艶男あじう  
 途中におおて婦人遇者そ又顧盼するそのむじとや技のにおる  
 棠花の身して今年二十歳の春迄を書を要する縁故ありその  
 事情ハ四箇周れ奉るなりて其事といふハ

一ツヨハ

刺繍剪裁小精巧又能家東成齊房貞女  
 婦人の諸藝不悉くは且風流才和勝る奇女

三ツヨハ

三十二相具うつくもれを暇なき玉乃美女

四ツヨハ

良人乃種子はていまだ男ふる馴ぶる處女

此匹箇周乃羨 誓一个を虧子束るく金々備でるに中これ匹偶

たすずとてうつく目小愛のめははてして後月日をどほる惣じて

世向乃女流大概貞と才と顔とあるハ甚稀なまハなり後イ

小福十年の春羽列江の徳よおおて天女法樂のより書画乃會を

借也あり艶之依もまはる相とて標峰檢校といへ琵琶法師を

まもまひ小田原成發進てやぞに徳小をふてぬは徳修檢校と云

ハ曲藝の如もはて本琴とのふものを工する伯の逸點がみふ

こゝろすさて此日江た坊とふ居停子諸國の達人藝の如くす

集しころも艶之依ハ元より高名の才ふるゆ(筆を下せば千言立











い再く成耻て世をくらやまに備へすたど風雅の趣とく老を志ひ  
 まる高後陽房と号すを宗嘉大量はて幾万石の材まゐる事  
 守鎌房の後小次郎専ら金買ひき者を悩まして人をすふ事我子の  
 正く守山故は遠近に人のあが親希長者と稱して彼を以貴し  
 かり往昔北條兼後中平頭時公造まゝり金澤又康は蹟九代  
 りて類廢はるる百縁教中して北條家も鉄券と湯戸あり  
 たよ金沢の沖所合ふ又庫と嘗て和漢乃書籍を養ひ學校と  
 設らざるが今學寮は養ひ置ひしまるの學後東國北國より多く  
 來るとどうもとある叔と又彼内室演歌主人の國學は陸和ま小  
 志ある婦女子をあつて集れて教諭し果は從良の事もとよく小  
 計ひやせしむる人々を所の要人の宮侍の女史等用て

いりも詩身後法跡鞠小ゆき法つき花むまび等兼てはる事又  
 貞統乃女児等かりのふ世よと好む事まひたまはる能之佑  
 成はて悟慈して大ひ小孫あてまらる祝詞の下りるハ実よみ主人ハ  
 天下無双の名婦人として世に婦女の方々の領首をば徳峰がふふ  
 まる愛のあはれまふ近侍小園園文章の伯女流翰死の才あるを  
 けりすとのふもとの又數十人の内よま主人四名の女を撰出される類  
 を出華を拔者とはびよく時を停て看とるもの多敷の中ハ極で  
 釋を考みびきりたるまそりゆる女四名あんとて語里ルハ絶之佑が  
 又たあはれその四名を看分ゆきて脚又遠眼植を看守り晴とた  
 りく熟く看去ふまを几骨ふあるる美女四名まをどののく  
 と見ふまのけその一名を只見ふ





うらたしきまのし  
 るる 艱妍清奇 青絲の梳宿 春雲を堆一翠冠 飄々惚然  
 とも 香風十里の吹氣 氳たる 佳氣三霄 小過多愁之依を  
 見せしよく 神蕩意揺て 醉るが如く 只呆とて 討あるまは  
 雲の北麓六七所の間 潮乃下たる 持るまれば なる後路よて 渡す  
 悠揚して 徳山試弓を 進登る 靴小一擁 牡丹鶯連に 大坊の前  
 いろ 髪之依が 眼下 試遇を なるま 正も 是赤繩の 繫るべき 時 幕到る  
 ちや 髪之依が 手に 持る 吟箋の 扇るもの うちを 情を 落て  
 らす ちの 路に 肩小 著て 地よ 墜き 路に 何事と 頭  
 と 回 搦上を 見る じに 艶之 依 搦 打小 倚居て 忽ち 二人 面成 合せ  
 四目二つ び 見て 若小 直下 向上 見と 見と 見と 原より 此路に 棟  
 ち 洗小 集 為 ありて 潘安 子 建 才 ありて 吹 嘘 せ ども

実を 訪ひ して 不 惣て なる 凡庸の 俗なる 嫌ひて 平た ます 成  
 恨と 由り 今日 艶之 依が 風 諷 俊 雅の 人物なる 成 見て いくん ぞ 意 ざん ち  
 ち 満 面よ 咲を 帯て 目を なるま ぎ 髪之 依ハ 路に 今 様小 眼 裏 乃  
 語の 中より 試 見て なる 舞 足の 踏を 忘る 意 ぎ 様と 下を 来る 門 亦  
 小 出て 忙 しく 身を 躬め なるま 八 某 今 不 覚 小 扇 子 とも 玉  
 一 簾 忽の ぬる まひ 甚しき 無 礼を せし たり 乃 唐 突の 罷と 宥 さま  
 とも 再三 只 顧 小 徳 まれ 巴 路に 尚 向 小 ぬくの とき 男 中 の 養 人 小 屈  
 ら して 忽ち 面 蓋 せ 以 斂 咲て 疎の 厩 向 偷 して 何 ち 此の 分 説  
 成 ば 狂 小 や 汲 げ 牙 と 傷 ち なるま 何 小 今 ち 某 束 の 小 ち ん ち  
 頻 ち 小 眸 と 際 して 情を 通 ず 此 時 養 婢 等 八 某の 傍 依 主人 小  
 附 率て ち ば 所 と じ ち 路に 忙 しく ちの 場を 立 込 ち ち 尚

七八遍頭を回してそのかみぬ髪之依も又眼色を大して見おほし路に  
 於て本院の門前にはほご又懸之依が高と顧之微晒て暖目世が遠小  
 一族の中おまぎれてきお門内お進みぬこては本院と六別院  
 主人祈禱のほむ処より外向の紫の幕が張掃除奇麗なる  
 して慈敏乃管侍最者重なる光景なり此時艶之依ハ甚ごん迷  
 く本院の門前お眺むる待も彼路にさらお出きたりとるは只呆  
 して又江左訪乃橋と小飯中某とルるよど姫塔檢校呵々と咲て云  
 公良久くいば乃お小桃御た世と某推料とる小かの春装秋冬  
 成一帯中お推んと相ひ控へにわびや懸之依も又咲て云某一枝の  
 花とまらぬ折びて心お易からずおひはる小奈河春装秋冬と一  
 時小採花獲る事おらんや西の路又咲て云一枝の花とハの青衣の美人  
 を求めことおたる元び精いさお懸之依の果してあまら某今うの花を  
 一目見下る意ぞ我意の花とほて縁たをとおりふがいのふ標後ごいなる  
 の路にまたなるの空お對揚と韓城宋玉おむまきく果て佳偶な  
 りとらるるならぬ事容易共懸ふま艶之依が云某金幣と厚  
 懸之の媒妁と以挑んおは花何奈と折さる事あらんや標橋頭を  
 擡ておいおく成就意来ははとの故の遠近の豪門富室日來噂と  
 亦そのまをとりともの四個の女おのく心小大事ありて物おらるる  
 草の院や漫遊主人堂中の玉れ如く寵を深き其ハなしく以頼くハ  
 故に區車率雨れりてり遠初の美ありハの月の面目にも拘て人の  
 嘲嗚と招く返罵と負意を廻され後とくハとんとお小懸之依に  
 なる程おしお思量してなるハ遠所見微さく一室貴お泥さる小

七八遍頭を回してそのかみぬ髪之依も又眼色を大して見おほし路に  
 於て本院の門前にはほご又懸之依が高と顧之微晒て暖目世が遠小  
 一族の中おまぎれてきお門内お進みぬこては本院と六別院  
 主人祈禱のほむ処より外向の紫の幕が張掃除奇麗なる  
 して慈敏乃管侍最者重なる光景なり此時艶之依ハ甚ごん迷  
 く本院の門前お眺むる待も彼路にさらお出きたりとるは只呆  
 して又江左訪乃橋と小飯中某とルるよど姫塔檢校呵々と咲て云  
 公良久くいば乃お小桃御た世と某推料とる小かの春装秋冬  
 成一帯中お推んと相ひ控へにわびや懸之依も又咲て云某一枝の  
 花とまらぬ折びて心お易からずおひはる小奈河春装秋冬と一  
 時小採花獲る事おらんや西の路又咲て云一枝の花とハの青衣の美人  
 を求めことおたる元び精いさお懸之依の果してあまら某今うの花を  
 一目見下る意ぞ我意の花とほて縁たをとおりふがいのふ標後ごいなる  
 の路にまたなるの空お對揚と韓城宋玉おむまきく果て佳偶な  
 りとらるるならぬ事容易共懸ふま艶之依が云某金幣と厚  
 懸之の媒妁と以挑んおは花何奈と折さる事あらんや標橋頭を  
 擡ておいおく成就意来ははとの故の遠近の豪門富室日來噂と  
 亦そのまをとりともの四個の女おのく心小大事ありて物おらるる  
 草の院や漫遊主人堂中の玉れ如く寵を深き其ハなしく以頼くハ  
 故に區車率雨れりてり遠初の美ありハの月の面目にも拘て人の  
 嘲嗚と招く返罵と負意を廻され後とくハとんとお小懸之依に  
 なる程おしお思量してなるハ遠所見微さく一室貴お泥さる小

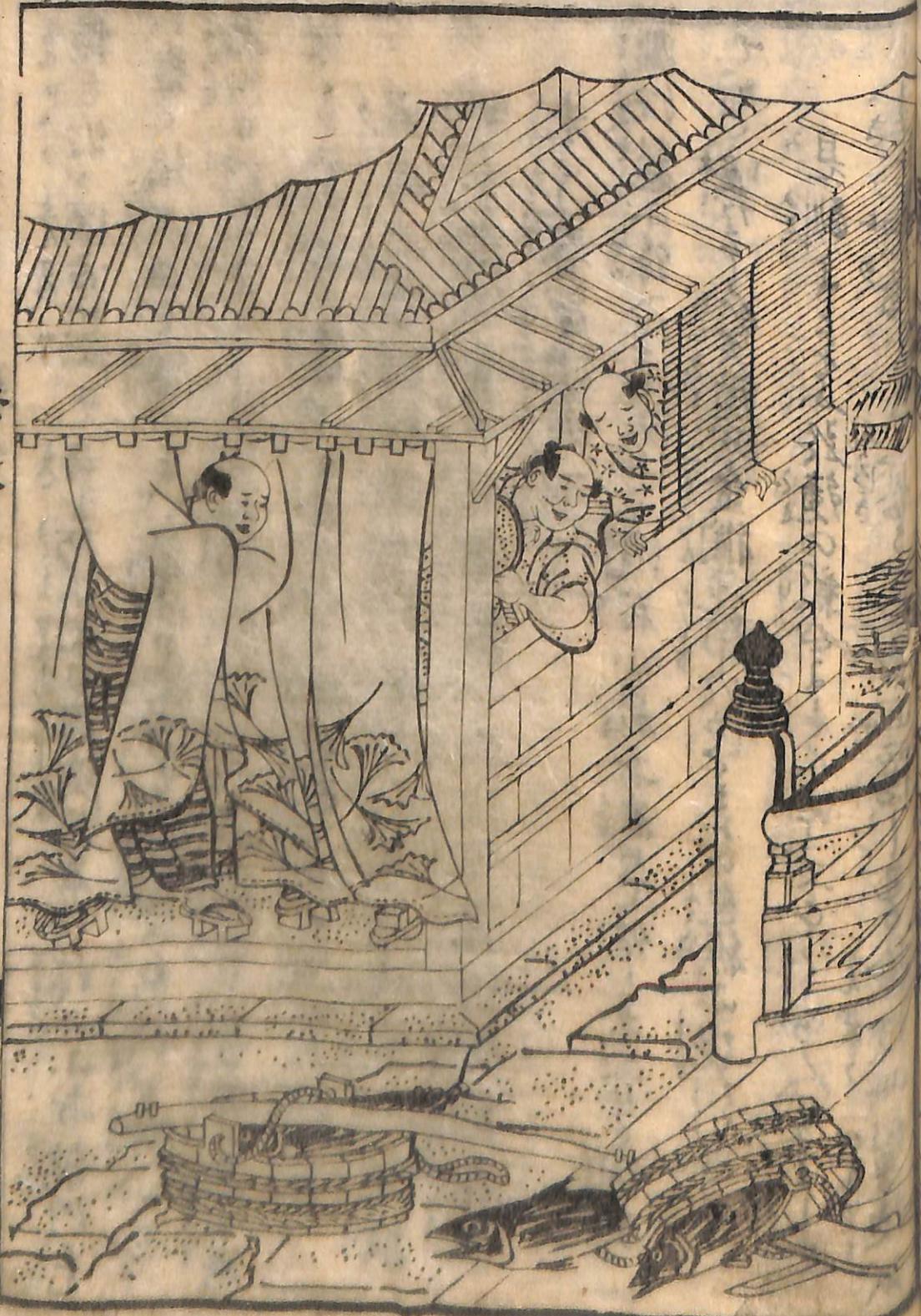
お由ていさせん某様と敷束と得んくじを只頼のみん動て定ま  
の「某」は先生の「よき」計較も示さるんや標峰は某見事  
小の場小を自烈を六は様素張儀とて説きもも快て其  
情と曲ゲテとてその射頭好時の面笑およびよく才  
備でる人よ配せんを某と小なるもあつ天を經りて地成緯  
く懸丹と徹一の場人成取ゆべきもこのまゝ我推しすおが  
のこびる高儀共及び起之依る某いれもしての場成請り  
むる事四つ先生良計もて我におお本意と逐まむるお於  
ハ実小本業乃而目うらまわのよも多候を申すまの持とまべ  
標峰がよひの我より望を起して壓つけおあ小金幣と用る取ハ  
取手候が望お様にて聘札の厚薄およす思宜く信を道て

渠を感てまむるにあのを勝おきて近くすそ彼路記を操ゆ小ハお  
々 這般々と低言はる熱之依多を拍て去甚奇う神機如  
算先生ハ株小則龍楠氏とて欺く其おく乃とく急ぎ此如  
計成乃お道とて即尚日夜と共ニ高儀小およびハ何のぞか計  
まんとは是標峰檢技が他意なりとハ後を小と聞てり

義は憑く高麗四郎深窓以謀る  
身を抛て艶之依闘争を促す

第二齣

かくて演漱主人此傳ふ九二十日ある伯留ありハ熱之依との間以  
窺ふ本院の動靜表裏はしてすにも計畧の出をべき拍とる  
ありが一夕標峰檢技事と旅館の探望小託て本院小の演漱  
夫人の機嫌と伺ひて後さてこの路江を傍なる處小招きて繼り



あんのすけ 多ん草 かな  
勢之依が演言小傲て言を巧小前日唐突せ車以揺く小お詠川も

ハ整く依がいさうう賜すまいらうう甲あものとして一箇の色袂と與(ル)六

路にも何と申らんうとはううぬ格 是れと云ふ小描金小雪(画)盒子が

はくまとの色袂小着ゆく春を松に説黄鶯調の詞をど賦(り)

風雨送春歸杜鵑秋花亂飛青苔滿院朱門間孤

燈半垂孤衾半欹蕭蕭孤影汪汪淚憶歸期相思

未了春夢遠天涯

路に勢小依入してありしが流石小教お赤めて何と云出せる伺もつ

てやう暖かきう勢鏡成金網の巾にはくまとの色袂小現引寄せ

見訓よととふ於鏡の影ごよとくとてとく歩人日するとも

持之里てまふともてつじに六艶之依音もたゆく押返く吟

遊小流うぬ思ひまどわろ小春の枝小演映主人の遊覽日敷こらて靴

江穿沢を登りあり金沢を眺路と歴と雲との日まをうけし六巻て

勢之依藍縷と股衣を成さのて忽ち下着の袴小をぬを換て穿

以女とかり只を幸く轎子も附率て前にまみ後はお直しての路に

影も由として暮ひゆくとの日ハ鎌倉雪の下も止宿ありし六巻之依も

同く傍の飯店小泊り翌日また後上を赴て行わぬ歩く其日の

夕六浦の郊内金澤小到此処ハ高買物成かへる勢花の地

る此一行ハ挑隊ハ扇市の中間を進むゆあハ當路の人の右とた小

除てゆく勢之依ハ街へより頻よの路に傍近く寄りて佐との

向をまるとれぬ路に首と向じて勢之依を二目見しりし勢を識勢

者乃指し矢を以て只顧を往て躊躇す楚之佐と又激怒す  
 してその面を打つるに矢を以て突かす同く躊躇を被路江も尚亦頭  
 と回て楚之佐を打撃す何とやらんもあきまらぬれども又其  
 云をのり来むるに公楚之佐も又此時頻りも睨目せしむるを  
 又其も向ふるもひきまらぬ路にば光景成りて愈々再二回とく  
 互小面を向合せしく短小一斬の筈比頭鋪あり新ふい百法も處  
 一今の奥二買の巾も臂高をまきまめ纏縛て競志く奥荷成  
 撫ひ大音を以物堅奥と呼し川流ひよんで走来じがやと區擔  
 乃尖を楚之佐が肩に撞めて忽ちおのまが力小都會て後彼と剛  
 荷成覆して奥と地とよまたらじぬひ奥二買大ひも憤りて紀よりく  
 のしち  
 奥二買のまらぬま

成るすや此難奥二買おる時、忽ち千金の損とるよと鎌倉の物堅奥  
 六船すや此奴づくの山乃後せん目いよ見えんと云猶小區擔とおつ執  
 只一打と親小艶之依が眉間も傍て打てけるも忽ち楚比頭鋪の肉より山  
 本を辱むべき臂を伸る奥二買が頸成攪で中不提お呀と声叫るる  
 奥二買ハ約莫七八回をり去り出され筋斗で撒舞るるもあきまらぬ  
 伴の筈比頭鋪れ肉も猛然とてあきまらぬ人あり楚之佐此人乃取さ  
 るよ首小濃紫の巾幘と裁き身も高麗織の仕衣を穿一腰の大刀を  
 帯し木履を踏み高長くて眼尖く鼻高てはあきまらぬ無双の佐依は  
 勢ひ傍ととらつて是より楚之佐大ひ力を以て比とよむるを下て一礼  
 成のくは此人打願きて云とも尚都内小我を知る後生等一人もあき  
 某元より強を折き弱成助く足下此と怒る来ぬれとを言ふる時小



君を備へ二人盗を執て互に快飲をどほる時其意之依演形夫分  
 の侍女路に在意隠匿て此處まで来りたるは我語を且いふ迄て自ら  
 をき東城懸勲母怒り高麗に第一星叙にも及びて来りたるは  
 路にいま人の書さると畢竟渠が後業とある小何の仔細あん  
 なる此の力を因ふ美ならず其驪駒領下の珠もとも容易く  
 能れども美人の情を撓る事如何なる十樊吟百馬其獲を合  
 力づくゆてい及びははる我小一の苦計ありとて艶之依が身小つ  
 低言如げ々と云海む怒之依大お喜びてとあるは其神妙の計  
 明日の行の終はそその夜に此酒樓におおて夜明兩人胸中の  
 東城傳りたるは是も福意のありなり

第九回 本物語 前編 卷之一 終



